

Sun Server X4-8 Microsoft Windows オ ペレーティングシステムインストールガイド

ORACLE®

Part No: E55403-01
2014 年 6 月

Copyright © 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	5
Windows OS のインストールについて	9
サポートされている OS のバージョンおよび最新情報	9
OS のインストールオプション	10
単一サーバーへのインストール方法	11
Oracle System Assistant	13
Oracle System Assistant のタスクの概要	13
Oracle System Assistant の OS のインストールタスク	14
Oracle System Assistant の取得	14
OS のインストールの準備	17
インストール方法のセットアップ	17
▼ ローカルコンソールのセットアップ	17
▼ リモートコンソールのセットアップ	18
BIOS の設定	22
▼ BIOS の最適なデフォルト設定のロード	22
▼ BIOS ブートモードの設定	23
Windows OS のインストール	25
▼ Windows をインストールする (Oracle System Assistant)	25
▼ Windows Server 2008 R2 をインストールする (手動)	28
▼ Windows Server 2012 R2 をインストールする (手動)	33
▼ Windows Server をインストールする (PXE)	39
サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定	40
▼ サーバーシステムツールのインストール	41
▼ システムドライバを更新する	43
iSCSI 仮想ディスクの設定	45
索引	47

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、Oracle の Sun Server X4-8 用の最新のファームウェア、ソフトウェア、およびドキュメントの入手方法を説明します。フィードバック用のリンクおよびドキュメントの変更履歴も記載されています。

- [5 ページの「Sun Server X4-8 モデル命名規則」](#)
- [5 ページの「最新のファームウェアとソフトウェアの入手」](#)
- [6 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)
- [6 ページの「ドキュメントとフィードバック」](#)
- [6 ページの「このドキュメントについて」](#)
- [7 ページの「サポートとトレーニング」](#)
- [7 ページの「寄稿者」](#)
- [7 ページの「変更履歴」](#)

Sun Server X4-8 モデル命名規則

Sun Server X4-8 という名前の意味は次のとおりです。

- X は、x86 製品であることを意味します。
- 最初の数字 4 は、サーバーの世代を意味します。
- 2 番目の数字 8 は、プロセッサの数を意味します。

最新のファームウェアとソフトウェアの入手

Oracle x86 サーバー、サーバー (ブレード)、およびブレードシャーシのファームウェア、ドライバ、およびその他のハードウェア関連ソフトウェアは、定期的に更新されています。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant – これは、工場出荷時にインストールされる Sun Oracle x86 サーバー向けの新しいオプションです。これには必要なすべてのツールとドライバ

が含まれており、ほとんどのサーバーに取り付けられている USB ドライブ上にあります。

- My Oracle Support – <https://support.oracle.com>
- 物理メディアのリクエスト – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。サポート Web サイト上の「問合せ」リンクを使用してください。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X4-8	http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle ILOM のバージョンのドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle HMP のバージョンのドキュメントを参照してください。	www.oracle.com/goto/ohmp/docs

このドキュメントについてのフィードバックは <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

このドキュメントについて

このドキュメントセット内の情報はトピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

サポートとトレーニング

次の Web サイトに追加のリソースがあります。

- サポート: <https://support.oracle.com>
- トレーニング: <http://education.oracle.com>

寄稿者

主な執筆者: Ray Angelo、Michael Bechler、Cynthia Chin-Lee、Lisa Kuder、Mark McGothigan、Ralph Woodley。

寄稿者: William Schweickert、Anthony Villamor、Mick Tabor、Richard Masoner、Tamra Smith-Wasel、Denise Silverman。

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントセットのリリース履歴です。

- 2014 年 4 月。初版。
- 2014 年 6 月。製品リリースのための変更。

Windows OS のインストールについて

このドキュメントでは、Oracle の Sun Server X4-8 に Microsoft Windows オペレーティングシステムをインストールする方法について説明します。

次の表には、オペレーティングシステムを正しくインストールするために実行する必要があるタスクの順序付きリストが示されています。

手順	説明	リンク
1	サポートされている Windows OS のバージョンの一覧を確認し、サーバーソフトウェアおよびハードウェアに関する最新情報を取得する方法を学習します。	9 ページの「サポートされている OS のバージョンおよび最新情報」
2	単一のサーバーまたは複数のサーバーでの OS のインストールのオプションを確認します。	10 ページの「OS のインストールオプション」
3	必要な手順を実行してインストールの準備を整えます。	「OS のインストールの準備」
4	OS をインストールします。	「Windows OS のインストール」

サポートされている OS のバージョンおよび最新情報

初期導入時には、Sun Server X4-8 は Windows Server 2008 R2 SP1、Windows Server 2012、および Windows Server 2012 R2 をサポートしています。サポートされているバージョンの Microsoft Windows Server に関する最新の情報については、次を参照してください。

<https://wikis.oracle.com/display/SystemsComm/Sun+Server+X4-8#tab:Operating-Systems>

注記 - このマニュアルでは、用語「Windows Server 2008 R2」は Windows Server 2008 のサポートされるすべてのバージョンを示すために使用されており、用語「Windows Server 2012 R2」は Windows Server 2012 のサポートされるすべてのバージョンを示すために使用されています。

注記 - サーバーに関する最新情報は、『Sun Server X4-8 プロダクトノート』に記載されています。『プロダクトノート』ドキュメントには、サーバーの利用可能なファームウェア更新およびハードウェアまたはソフトウェアの問題に関する詳細情報が記載されています。サーバー関連のドキュメントは、オンラインのサーバードキュメントライブラリで入手できます。<http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs> を参照してください。

OS のインストールオプション

OS を単一のサーバーにインストールするか、複数のサーバーにインストールするかを選択できます。このドキュメントの範囲は、単一のサーバーでの OS のインストールです。次の表に、これら 2 つのインストールオプションに関する情報を示します。

オプション	説明
複数のサーバー	次にある Enterprise Manager のページを参照してください。 http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html
単一のサーバー	次のいずれかの方法を使用して、単一のサーバーに OS をインストールします。 ■ ローカル: OS のインストールは、サーバーでローカルに実行されます。このオプションは、物理的にラックにサーバーを設置し終えたばかりのときに便利です。Oracle System Assistant を使用するか、手動によるインストールを実行します。追加のハードウェアが必要です。 ■ リモート: OS のインストールはリモートの場所から実行されます。Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) リモートコンソールプラスアプリケーションを使用して、Oracle System Assistant にアクセスするか、手動によるインストールを実行します。 注記 - Oracle System Assistant を使用して、ローカルまたはリモートで、単一のサーバー OS のインストールを実行します。

単一のサーバーに OS をインストールする方法と Oracle System Assistant の詳細については、次を参照してください。

- [11 ページの「単一サーバーへのインストール方法」](#)

■ 13 ページの「Oracle System Assistant」

単一サーバーへのインストール方法

Windows インストールメディアの提供方法を選択します。次の情報を使用して、ローカルかリモートのどちらの OS のインストールがニーズにもっとも適しているかを判断します。

メディアの配布方法	説明	要件
ローカルでの補助付き OS インストール	Oracle System Assistant を使用します。	■ ビデオモニター ■ USB キーボードとマウス ■ USB CD/DVD ドライブ ■ Windows 配布メディア 詳細については、12 ページの「補助付き OS インストール」を参照してください。
リモートでの補助付き OS インストール	Oracle System Assistant を使用します。	■ Oracle ILOM リモートコンソールプラスアプリケーション ■ リダイレクト CD/DVD ドライブまたは ISO イメージファイル ■ Windows 配布メディア 詳細については、12 ページの「補助付き OS インストール」を参照してください。
CD/DVD ドライブを使用したローカルでの手動による OS のインストール	サーバーに接続された物理 CD/DVD ドライブを使用します。	■ ビデオモニター ■ USB キーボードとマウス ■ USB CD/DVD ドライブ ■ Windows 配布メディア 詳細については、12 ページの「手動による OS インストール」を参照してください。
CD/DVD ドライブまたは CD/DVD ISO イメージを使用したりリモートでの手動による OS のインストール	Oracle ILOM リモートコンソールプラスアプリケーションが実行されているリモートシステムのリダイレクトされた物理 CD/DVD ドライブを使用します。	■ ブラウザが実行されているリモートシステム ■ CD/DVD ドライブまたは ISO イメージ ■ Windows 配布メディア ■ サーバー管理ポートに対するネットワークアクセス 詳細については、12 ページの「手動による OS インストール」を参照してください。
ネットワーク PXE インストール	Windows 展開サービス (WDS) サーバー上のカスタマイズされた Windows Imaging (WIM)	WDS を実行しているサーバーとそのサーバー用にカスタマイズされた WIM イメージ。 12 ページの「Windows 展開サービスによる OS のインストール」 を参照してください。

メディアの配布方法	説明	要件
	ファイル形式を使用します。	

補助付き OS インストール

これは、サポートされている OS をサーバーにインストールするためのもっとも簡単な方法です。この方法では、Oracle System Assistant を使用します。ユーザーがローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブまたは CD/DVD イメージで Windows OS のインストールメディアを配布すると、Oracle System Assistant アプリケーションによってインストールプロセスが開始され、必要なドライバがインストールされます。Oracle System Assistant オプションは、サーバーにインストールされている必要があります。Oracle System Assistant の詳細については、『[Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

手動による OS インストール

この方法では、OS のインストールに Oracle System Assistant を使用しません。代わりに、ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、CD/DVD イメージのいずれかで Windows 配布メディアを提供します。必要なツールおよびドライバも提供する必要があります。サーバー用のツールとドライバは、My Oracle Support サイトからサーバー固有および OS 固有のパッケージとして入手できます。OS をインストールするには、配布メディアのインストールウィザードを使用します。

Windows 展開サービスによる OS のインストール

展開サーバー環境から Windows をインストールできます。上級ユーザーは、Windows 展開サービス (WDS) サーバー上の特定のサーバー用にカスタマイズされた Windows インストールイメージ (WIM) を作成できます。こうしたインストールイメージファイルを作成しておく、ネットワークカードからサーバーをブートし、WDS システムからそのイメージを選択して展開できます。

WDS の詳細については、次を参照してください。

<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa967394.aspx>

WDS の概要および WIM イメージの作成の詳細については、次を参照してください。

<http://technet.microsoft.com/en-us/library/jj648426.aspx>

関連項目

[13 ページの「Oracle System Assistant」](#)

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバー向けの単一のサーバーシステム管理ツールです。これは、Oracle の Single Server Management 製品、および一連の関連ソフトウェアを統合して、サーバーを迅速かつ簡単に起動し保守できるようにするツール群を提供します。Oracle System Assistant のコンポーネントは次のとおりです。

- Hardware Management Pack
- Oracle Linux コマンド行環境
- オペレーティングシステム用のドライバとツール (旧ツールおよびドライバ CD/DVD)
- サーバー固有のファームウェア
- サーバー関連ドキュメント

Oracle System Assistant は、サーバー内に組み込まれており、工場でサーバー固有のツールとドライバで構成されます (これらのツールとドライバはオンラインアップデートによって保守されます)。

Oracle System Assistant の詳細については、次のトピックを参照してください。

- [13 ページの「Oracle System Assistant のタスクの概要」](#)
- [14 ページの「Oracle System Assistant の OS のインストールタスク」](#)
- [14 ページの「Oracle System Assistant の取得」](#)

Oracle System Assistant のタスクの概要

Oracle System Assistant は、次の一般的で有用な単一のサーバー管理プロビジョニングタスクのセットで構成されます。

- 補助付き OS インストール
- システムの概要とシステムインベントリ情報
- すべてのコンポーネント (ツール、ドライバ、ファームウェアなど) のオンラインアップデートの取得
- システムファームウェア (BIOS および Oracle ILOM) とホストバスアダプタファームウェアのアップデート
- RAID および Oracle ILOM (SP) の構成

- サーバーネットワーク構成
- 機能と組み込みのメディア整合性チェックの無効化
- 実行環境を使用可能にする Linux シェル端末ウィンドウ
- Oracle Hardware Management Pack へのアクセス (Linux シェルを使用)
- Oracle System Assistant の復旧

関連項目

[14 ページの「Oracle System Assistant の OS のインストールタスク」](#)

Oracle System Assistant の OS のインストールタスク

Oracle System Assistant の OS のインストールタスクは、サポートされている OS の補助付きインストールを提供します。OS インストールメディアを提供すると、Oracle System Assistant がインストールプロセスを開始します。

補助付き OS インストールは、サーバーでサポートされているすべてのオペレーティングシステムに使用できるわけではありませんが、Windows では使用できます。ただし、サーバーでサポートされている OS がインストールされると、Oracle System Assistant を使用して、OS ドライバに加えてすべてのコンポーネント (ファームウェア、ツール、ドライバ、その他の関連ソフトウェア) を更新できます。

関連項目

[14 ページの「Oracle System Assistant の取得」](#)

Oracle System Assistant の取得

サーバーが Oracle System Assistant をサポートしている場合、そのサーバーにすでにインストールされている可能性があります。

- Oracle System Assistant がすでにインストールされており、最新バージョンが必要な場合は、Get Updates タスクを使用して Oracle System Assistant を更新できます。
- Oracle System Assistant がサーバーにインストールされているが、破損または上書きされている場合は、<http://support.oracle.com> からリカバリ ISO イメージをダウンロードしてください。
- サーバーが Oracle System Assistant をサポートしているが、Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、Oracle の販売代理店までお問い合わせください。

関連項目

『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)

OS のインストールの準備

OS をインストールする前に、インストール方法を設定する必要があります。このセクションでは、OS のインストールの準備手順について説明します。次のタスク表をガイドとして使用してください。

手順	説明	リンク
1	OS インストールのタスクの表をすでに確認している必要があります。	「Windows OS のインストールについて」
2	選択したインストール方法に基づいてインストールのセットアップを行います。	■ ローカルインストールの場合: 17 ページの「ローカルコンソールのセットアップ」 ■ リモートインストールの場合: 18 ページの「リモートコンソールのセットアップ」
3	最適なデフォルト値をロードし、BIOS モードを選択して、BIOS を準備します。	22 ページの「BIOS の設定」
4	準備のための手順が完了したら、OS をインストールします。	「Windows OS のインストール」

インストール方法のセットアップ

- [17 ページの「ローカルコンソールのセットアップ」](#)
- [18 ページの「リモートコンソールのセットアップ」](#)

▼ ローカルコンソールのセットアップ

ローカル OS インストールはサーバーで実行されます。ローカルインストール方法として推奨される手順は、Oracle System Assistant の OS のインストールタスクを使用することです。この手順を使用して、ローカルの Oracle System Assistant の補助付きインストールまたはローカルの手動 (補助なし) インストールをセットアップします。

注記 - ローカル OS インストールの場合、追加のハードウェアが必要で、サーバーの Web アクセスが推奨されます。

- 始める前に
- 『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の説明に従って、サーバーの設置をすでに実行しているはずです。
 - 次の項目が必要です。
 - 15 ピン (DB-15) コネクタ機能を備えたビデオモニター
 - USB キーボードとマウス
 - USB デバイス (CD/DVD ドライブまたは USB フラッシュドライブ)
 - オンラインアップデートの場合、サーバーが Web にアクセスできる必要があります。
1. サーバーがスタンバイ電力モードであることを確認します。
 2. ビデオモニターをサーバー前面のビデオコネクタに接続します。
 3. キーボードとマウスを、サーバー前面のいずれかの USB コネクタに接続します。
 4. CD/DVD ドライブをサーバーの前面にあるほかの USB コネクタに接続します (サーバーに DVD ドライブが装備されていない場合のみ)。

次の手順 [22 ページの「BIOS の設定」](#)

▼ リモートコンソールのセットアップ

リモート OS インストールは、Oracle ILOM リモートコンソールプラスアプリケーションおよびリダイレクトされた CD/DVD ドライブまたは CD ISO イメージを使用して実行されます。リモートインストールの推奨される手順は、Oracle System Assistant の「Install OS」タスクを使用する手順です。この手順を使用して、リモートの Oracle System Assistant の補助付きインストールまたはリモートの手動 (補助なし) インストールをセットアップします。

注記 - CD/DVD-ROM または CD/DVD-ROM ISO イメージのオプションを使用して OS をインストールすると、CD/DVD-ROM のコンテンツにネットワーク経由でアクセスするため、インストールにかかる時間が大幅に長くなります。インストールの所要時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。また、このインストール方法では、一時的なネットワークエラーにより問題が生じるリスクが高くなります。

始める前に 次の要件を満たしている必要があります。

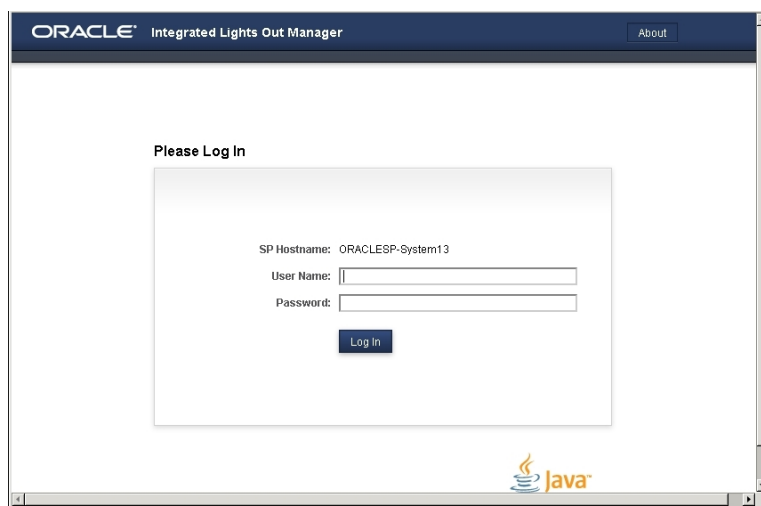
- 『Sun Server X4-8 設置ガイド』の説明に従って、サーバーの設置をすでに実行しました。
- サーバースerviceプロセッサ (SP) が、使用しているサーバーの Oracle ILOM ドキュメントの手順に従ってセットアップ済みです。
- Sun サーバーの Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークに Oracle ILOM リモートコンソールシステムが接続されています。
- 使用しているサーバーでの Oracle ILOM のバージョンの『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>) での説明に従って、リモートクライアントで Oracle ILOM リモートコンソールプラスを実行するための Java、ブラウザ、および構成の要件を満たしていることを確認します

注記 - この手順に示されているスクリーンショットの一部は、表示される画面とは異なる場合があります。

1. Oracle ILOM にアクセスするには、サービスプロセッサの IP アドレスをリモートコンソールシステム上のブラウザに入力します。

必要に応じて、セキュリティーのプロンプトに答えます。

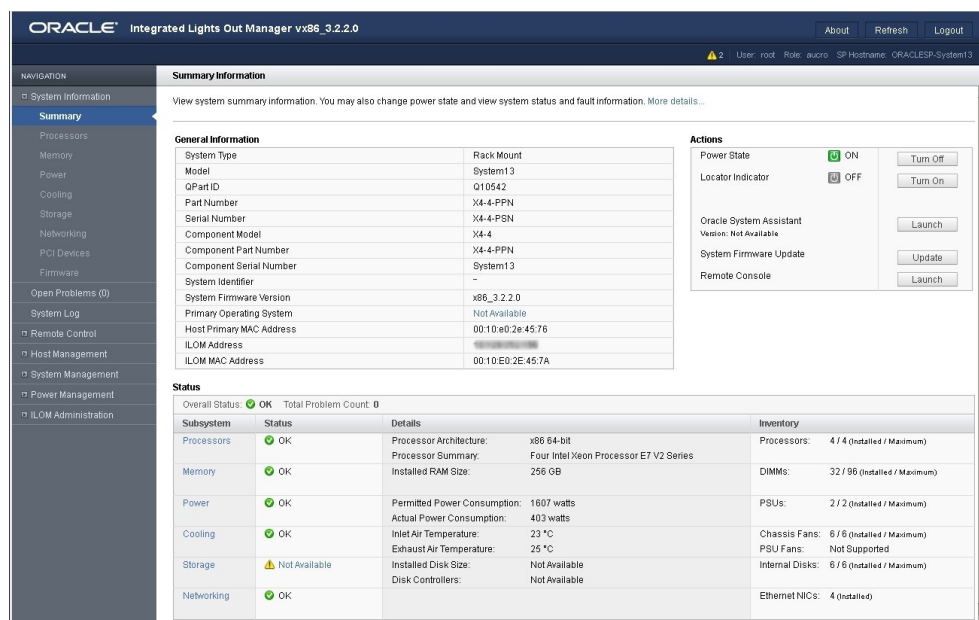
Oracle ILOM のログイン画面が表示されます。



2. ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。

Oracle ILOM リモートコンソールプラスの機能を使用するには、コンソール (c) の役割権限を含むアカウントを使用してログインする必要があります。

Oracle ILOM の「System Summary」画面が表示されます。



3. 「Remote Console Launch」ボタンをクリックします。

表示されるプロンプトがある場合は、それに答えます。

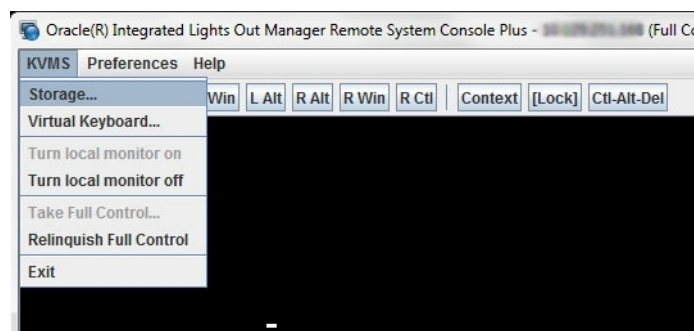
「Oracle ILOM Remote Console Plus」画面が表示されます。

4. ストレージメディアをリダイレクトするには、次のアクションを実行します。

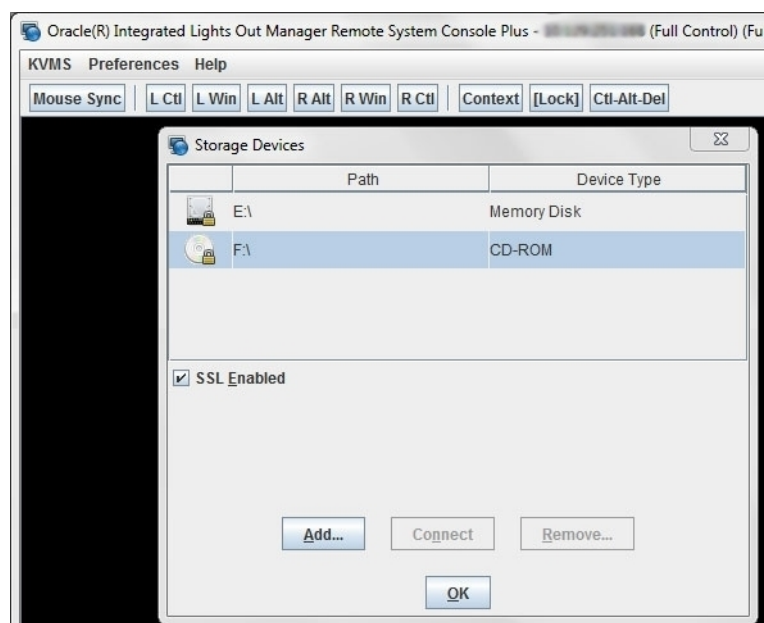
- a. リダイレクションセッションのフルコントロール権限があることを確認します。フルコントロール権限がない場合は、「KVMS」メニューの「Take Full-Control」をクリックします。

注記 - フルコントロール権限を持つプライマリユーザーの場合、「KVMS」メニューの「Take Full-Control」オプションは無効になっています。

- b. 「KVMS」メニューの「Storage」をクリックします。



「Storage Device」ダイアログボックスが表示されます。



注記 - 「Storage Device」ダイアログボックスには、Oracle ILOM リモートコンソールプラスクライアントで検出されたストレージドライブデバイス (CD、DVD、フロッピー、USB デバイスなど) が自動的に表示されます。ドライブ上にロックアイコンが表示されて、1) ドライブが存在すること、および 2) ドライブ内にブート可能メディアが見つからなかったことが示されます。

- c. ストレージイメージ (CD/DVD イメージなど) を「Storage Device」ダイアログボックスに追加するには、「Add」をクリックします。

- d. 「Storage Device」ダイアログボックスからストレージメディアをリダイレクトするには、ストレージメディアを選択して「Connect」をクリックします。

注記 - 「Storage Device」ダイアログで「Connect」をクリックすると、「Connect」ボタンのラベルが「Disconnect」に変化します。

次の手順 [22 ページの「BIOS の設定」](#)

BIOS の設定

オペレーティングシステムをインストールする前に、実行する予定のインストールの種類をサポートするように、BIOS 設定が構成されていることを確認する必要があります。次のトピックでは、インストールをサポートするように BIOS を構成する方法について具体的に説明しています。

- [22 ページの「BIOS の最適なデフォルト設定のロード」](#)
- [23 ページの「BIOS ブートモードの設定」](#)

▼ BIOS の最適なデフォルト設定のロード



注意 - データ損失が発生します。この手順では、BIOS の設定をデフォルト値にリセットし、以前にカスタマイズした設定をすべて上書きします。カスタマイズされた設定を維持するには、デフォルト値をロードする前に、各メニューを確認し、カスタマイズされた値を書きとめます。

BIOS 設定ユーティリティには、サーバーにとって最適な BIOS 設定をロードするためのオプションが含まれています。この手順を実行して、BIOS が最適なデフォルト値に設定されるようにします。

- 始める前に
- サーバーにはストレージドライブが取り付けられています。
 - サーバーへのコンソール接続が確立されています。

1. サーバーの電源を入れます。

コンソールに POST メッセージが表示されます。

2. メッセージに注目し、プロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。

3. 出荷時のデフォルト値が設定されるようにするには、F9 を押します。

4. 変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了するには、F10 を押します。

次の手順 [23 ページの「BIOS ブートモードの設定」](#)

▼ BIOS ブートモードの設定

BIOS ファームウェアは、レガシー BIOS と UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) の両方をサポートしていますが、デフォルト設定はレガシーです。オペレーティングシステムによっては、レガシー BIOS と UEFI BIOS の両方をサポートしているものもあれば、レガシー BIOS のみをサポートしているものもあります。

次の Microsoft Windows オペレーティングシステムでは、UEFI またはレガシー BIOS ブートモードがサポートされます。

- Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1
- Microsoft Windows Server 2012
- Microsoft Windows Server 2012 R2

OS をインストールする前に、BIOS ブートモードを設定するためにこれらの手順に従います。

1. **サーバーの電源を入れます。**
コンソールに POST メッセージが表示されます。
2. **メッセージに注目し、プロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。**
BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。
3. **BIOS 設定ユーティリティで、左右の矢印キーを使用して「Boot」メニューに移動します。**
「Boot」メニュー画面が表示されます。
4. **下矢印キーを使用して、「UEFI/BIOS Boot Mode」フィールドを選択します。**

5. Enter を押し、上下の矢印キーを使用して、目的の BIOS ブートモードオプションを選択します。

レガシーまたは UEFI のブートモードの詳細については、『X4 シリーズ管理者ガイド』の「BIOS の設定と構成」セクションを参照してください。参照先:

『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)

6. 変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了するには、F10 を押します。

次の手順 [「Windows OS のインストール」](#)

Windows OS のインストール

このセクションでは、OS のインストールプロセスについて説明します。次のタスク表をガイドとして使用してください。

手順	説明	リンク
1	「OS のインストール準備」タスク表の手順をあらかじめ実行しておく必要があります。	「OS のインストールの準備」
2	選択した方法で Windows をインストールします。 注記 - OSA バージョン 1.2 以前の場合、Windows ではフルインストールオプションのみサポートされています (サーバーコアインストールオプションはサポートされていません)。	■ 25 ページの「Windows をインストールする (Oracle System Assistant)」 ■ 28 ページの「Windows Server 2008 R2 をインストールする (手動)」 ■ 33 ページの「Windows Server 2012 R2 をインストールする (手動)」 ■ 39 ページの「Windows Server をインストールする (PXE)」
3	サーバーシステムツール、ドライバ、および追加ソフトウェアをアップデートします。	40 ページの「サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定」 。

▼ Windows をインストールする (Oracle System Assistant)

Oracle System Assistant の OS のインストールタスクは、サポートされている OS を Sun Server X4-8 にインストールするためのもっとも簡単な方法です。

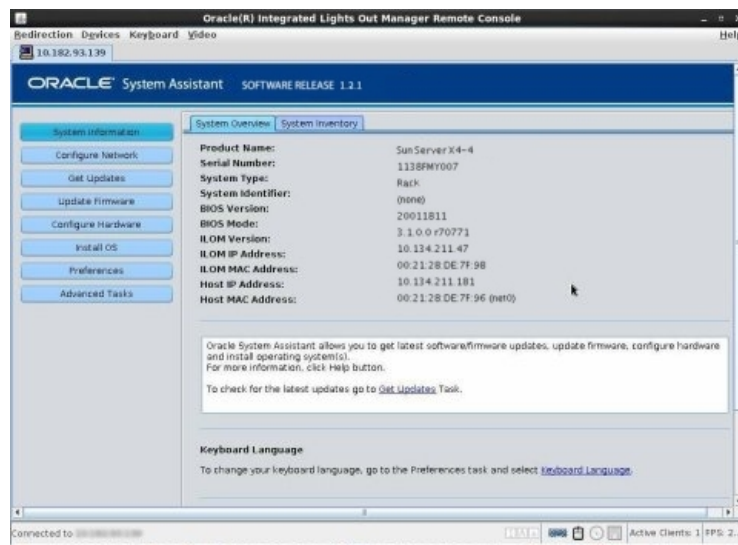
Oracle System Assistant の詳細については、『[Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

- 始める前に
- Microsoft Windows OS インストール配布メディアを取得します。
 - システムネットワークポートを構成して、Oracle System Assistant が最新のドライバ/ファームウェアを Oracle からダウンロードできるようにします。その後 OSA で、そのポートや会社で必要とされるプロキシを使用するように構成します。

- 17 ページの「インストール方法のセットアップ」で説明されているように、サーバーをローカルまたはリモートのインストール用に設定します。その後、次のいずれかを実行します。
 - ローカルインストールの場合: OS 配布メディアを接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できるように準備しておきます。
 - リモートインストールの場合:
 - OS 配布メディアが DVD-ROM の場合、その DVD-ROM をリモートクライアントの DVD-ROM ドライブに挿入し、Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」->「Storage」メニューからマウントします。
 - OS 配布メディアの ISO イメージを使用する場合、イメージが Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」->「Storage」メニューからマウントされることを確認します。
1. サーバーの電源を入れる、またはサーバーをブートし、モニターまたはリモートコンソール画面を注視しながら、F9 キーを押して Oracle System Assistant を起動するように求めるプロンプトが表示されるのを待ちます。

```
Version 2.14.1219. Copyright (C) 2011 American Megatrends, Inc.  
BIOS Date: 09/06/2011 12:12:06 Ver: 20011300  
Press F2 to run Setup (CTRL+E on serial keyboard)  
Press F8 for BBS Popup (CTRL+P on serial keyboard)  
Press F12 for network boot (CTRL+N on serial keyboard)  
Press F9 to start Oracle System Assistant
```

2. プロンプトが表示されたら F9 キーを押します。
Oracle System Assistant System の「Overview」メイン画面が表示されます。



3. 「Configure Network」タスクボタンをクリックします。
 - a. ドロップダウンリストからアクティブなネットワークインタフェースデバイスを選択します。
 - b. ネットワーク構成方法を設定します (dhcp または静的 IP)。
 - c. プロキシ (必要に応じて) を構成します。
 - d. 「Apply」をクリックしてから「Yes」をクリックして続行します。
4. Oracle System Assistant を更新するには、「Get Updates」ボタンをクリックします。

これにより、OS のインストールを開始する前に、Oracle System Assistant によって最新のファームウェア、ツール、ドライバが用意されます。

注記 - ローカルリポジトリを設定していない限り、Oracle サイト から Oracle System Assistant を更新するために、Web アクセスが必要になります。

5. コンポーネントのファームウェアを更新するには、「Update Firmware」ボタンをクリックします。

これにより、OS のインストール開始前に、サーバーのファームウェアおよびドライバが確実に最新のものになります。

6. システムに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) が存在しているものの、まだ仮想ドライブを作成していない (少なくとも RAID 0 で) 場合、「Configure Hardware」ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。

「RAID Configuration」画面が表示されます。OS に使用するボリュームをドライブに作成し、そのボリュームをブート可能にします。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の「[Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成](#)」を参照してください。

7. 「Install OS」ボタンをクリックします。
「Install OS」画面が表示されます。
8. インストールしようとしている OS のバージョンがサポートされていることを確認するために、「View supported operating systems」ウィンドウのドロップダウンメニューに表示されるリストを確認します。

9. 「Select your install media location」セクションで、OS 配布メディアの場所を指定します。

CD/DVD または仮想ドライブを選択できます。

10. プロンプトに従ってインストールを完了します。

インストールプロセスでは、サーバーが 1 回以上リブートします。

参照 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定」](#)

▼ Windows Server 2008 R2 をインストールする (手動)

このセクションでは、Oracle System Assistant を使用せずに、Windows Server 2008 R2 をインストールする方法について説明します。OS はローカルまたはリモートのどちらかの方法でインストールできます。



注意 - データ損失の可能性があります。OS のインストールを行うとブートディスクがフォーマットされるため、ディスク上の既存のデータは、インストール済みの OS も含め、すべて消去されます。

始める前に ■ Microsoft Windows OS インストール配布メディアを取得します。

- システムに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) がある場合、ブート可能な仮想ドライブを (少なくとも RAID 0 で) 作成します。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の「[Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成](#)」を参照してください。
- 17 ページの「インストール方法のセットアップ」に説明されているように、ローカルまたはリモートのインストールに備えて準備します。その後、次のいずれかを実行します。
 - ローカルインストールの場合: OS 配布メディアを接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できるように準備しておきます。
 - リモートインストールの場合:
 - OS 配布メディアが DVD-ROM の場合、その DVD-ROM をリモートクライアントの DVD-ROM ドライブに挿入し、Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」->「Storage」メニューからマウントします。
 - OS 配布メディアの ISO イメージを使用する場合、イメージが Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」->「Storage」メニューからマウントされることを確認します。

1. サーバーの電源を入れるか、またはリブートします。

リモートインストール方法を使用している場合は、Oracle ILOM を使用してサーバーの電源を入れたりリブートしたりすることができます。

BIOS メッセージが表示されます。



2. 選択肢のリストが表示されるまで画面を注視し、表示されたら F8 を押して「BBS Popup」を選択します。

注記 - BIOS メッセージ (BIOS メニュー選択リストも含む) はすぐに消えてしまいます。メッセージを見逃してしまった場合は、サーバーの電源を入れ直し、ブート中に F8 キーを押したままにして、BBS ポップアップメニューが表示されるのを待ちます。

しばらくすると、ブート可能なデバイスのリストとともに「Select Boot Device」メニューが表示されます。

3. 次のようにリストからブートデバイスを選択します。

- ローカルインストールの場合、Windows 配布メディアをサーバーの CD/DVD ドライブに挿入し、デバイスのリストからローカルインストールを選択して Enter を押します。
- リモートインストールの場合、クライアントのリモートでマウントされた仮想 CD/DVD ドライブを選択し、Enter を押します。

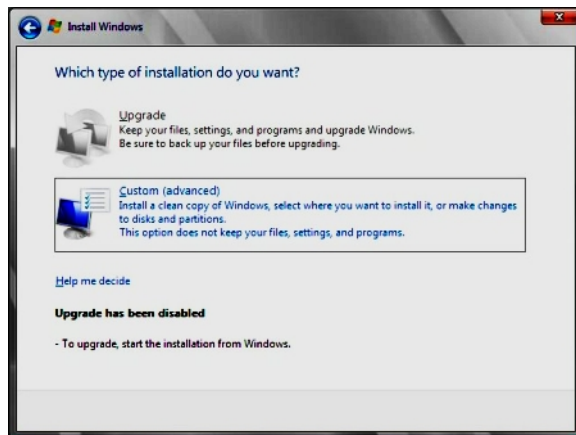
注記 - Oracle System Assistant USB のブートエントリが OS をインストールするハードディスクの下にあることを確認してください。システムの BIOS 設定ユーティリティを使用してこの順序を設定できます。

制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。

4. 「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたら、いずれかのキーをすばやく押します。

Windows インストールウィザードが起動します。

5. インストールウィザードの指示に従って進み、「インストールの種類」画面が表示されたら、「カスタム (詳細)」をクリックします。

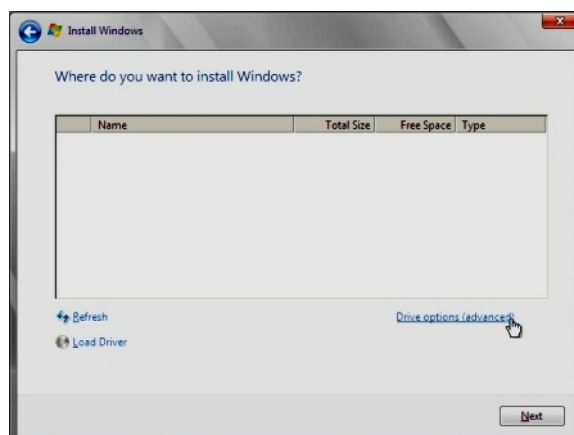


6. 「どこに Windows をインストールしますか?」画面で、次のいずれかの手順を実行します。

- Windows Server 2008 R2 用の大容量記憶装置ドライバを追加する場合は、「ドライバの読み込み」をクリックして、大容量記憶装置ドライバの格納場所 (CD/DVD または USB フラッシュドライブ) に移動し、ドライバ情報ファイル (.inf) を選択します。

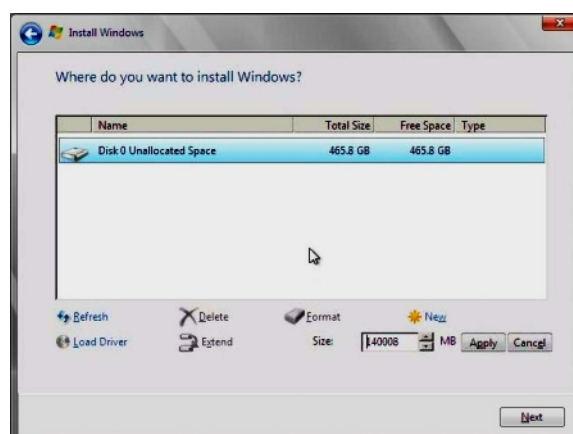
注記 - Windows Server 2008 R2 の場合、接続された CD/DVD または Oracle System Assistant USB フラッシュドライブを介してドライバにアクセスする必要があります。ドライバにアクセスできない場合、次の図に示すように、ディスクが表示されなくなります。

- Windows のデフォルトのパーティション設定を選択する場合は、「次へ」をクリックします。手順 8 に進みます。
- Windows のデフォルトのパーティション設定をオーバーライドする場合は、「ドライブオプション (詳細)」をクリックし、次の手順に進みます。



注意 - データ損失の可能性があります。既存のパーティションをフォーマットしたりパーティションを作成し直したりすると、そのパーティションにあるすべてのデータが消去されます。

7. 詳細ドライブオプション画面で、次の操作を実行します。
 - a. 既存のパーティションを削除するには、「削除」をクリックします。
 - b. 新しいパーティションを作成するには、「新規作成」をクリックします。
 - c. 必要に応じてサイズ設定を変更し、「適用」をクリックします。
 - d. 「次へ」をクリックします。



Windows のインストールが開始されます。インストールプロセス中、サーバーは複数回リブートします。

8. インストールプロセスが完了したら、「OK」をクリックします。

Windows が起動し、管理者パスワードを要求されます。

9. パスワードを入力して、「OK」をクリックします。

注記 - パスワードは 8 文字で、数字が 1 つ、大文字が 1 つ含まれている必要があります。詳細は、アカウント作成画面のアクセシビリティのリンクをクリックしてください。

管理者アカウントにパスワードを割り当てると、Windows Server 2008 R2 のデスクトップが表示されます。

参照 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定」](#)

▼ Windows Server 2012 R2 をインストールする (手動)

このセクションでは、Oracle System Assistant を使用せずに、Windows Server 2012 R2 をインストールする方法について説明します。OS はローカルまたはリモートのどちらかの方法でインストールできます。



注意 - データ損失の可能性があります。OS のインストールを行うとブートディスクがフォーマットされるため、ディスク上の既存のデータは、インストール済みの OS も含め、すべて消去されます。

始める前に

- Microsoft Windows OS インストール配布メディアを取得します。
- システムに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) がある場合、ブート可能な仮想ドライブを (少なくとも RAID 0 で) 作成します。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の「[Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成](#)」を参照してください。
- [17 ページの「インストール方法のセットアップ」](#)に説明されているように、ローカルまたはリモートのインストールに備えて準備します。その後、次のいずれかを実行します。
 - **ローカルインストールの場合:** OS 配布メディアを接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できるように準備しておきます。
 - **リモートインストールの場合:**

- OS 配布メディアが DVD-ROM の場合、その DVD-ROM をリモートクライアントの DVD-ROM ドライバに挿入し、Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」->「Storage」メニューからマウントします。
- OS 配布メディアの ISO イメージを使用する場合、イメージが Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」->「Storage」メニューからマウントされることを確認します。

1. サーバーの電源を入れるか、またはリブートします。

リモートインストール方法を使用している場合は、Oracle ILOM を使用してサーバーの電源を入れたりリブートしたりすることができます。

BIOS メッセージが表示されます。



2. 選択肢のリストが表示されるまで画面を注視し、表示されたら F8 を押して「BBS Popup」を選択します。

注記 - BIOS メッセージ (BIOS メニュー選択リストも含む) はすぐに消えてしまいます。メッセージを見逃してしまった場合は、サーバーの電源を入れ直し、ブート中に F8 キーを押したままにして、BBS ポップアップメニューが表示されるのを待ちます。

しばらくすると、ブート可能なデバイスのリストとともに「Select Boot Device」メニューが表示されます。

3. 次のようにリストからブートデバイスを選択します。

- ローカルインストールの場合、Windows 配布メディアをサーバーの CD/DVD ドライブに挿入し、デバイスのリストからローカルインストールを選択して Enter を押します。
- リモートインストールの場合、クライアントのリモートでマウントされた仮想 CD/DVD ドライブを選択し、Enter を押します。

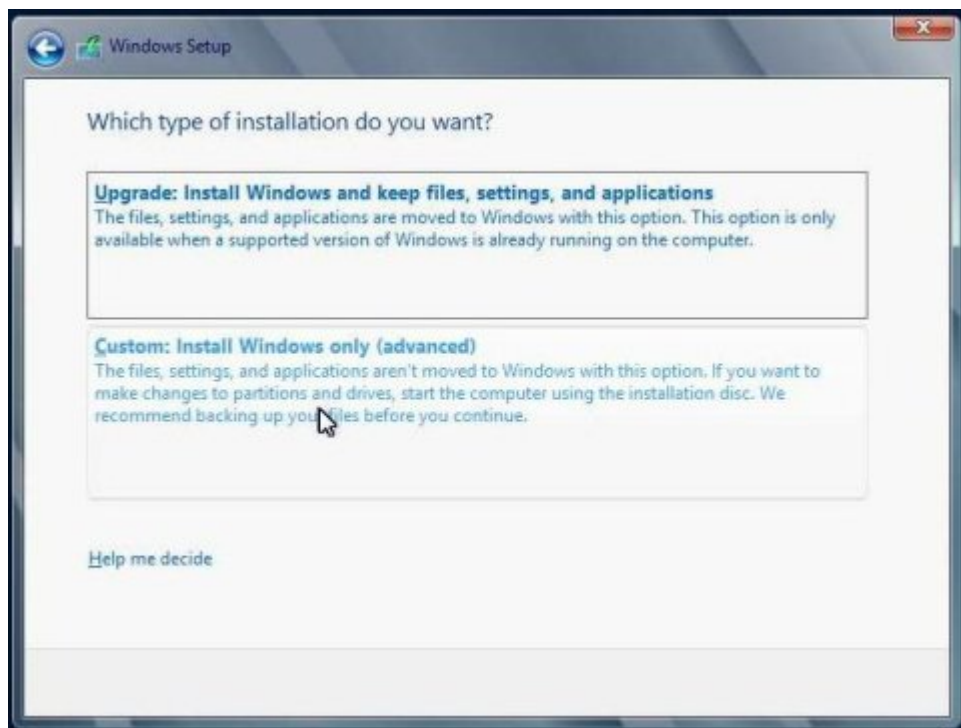
注記 - Oracle System Assistant USB のブートエントリが OS をインストールするハードディスクの下にあることを確認してください。システムの BIOS 設定ユーティリティーを使用してこの順序を設定できます。

制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。

4. 「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたら、いずれかのキーをすばやく押します。

Windows インストールウィザードが起動します。

5. インストールウィザードの手順を進めて、「インストールの種類」が表示されたら「カスタム (詳細)」をクリックします。



6. 「どこに Windows をインストールしますか?」画面で、次のいずれかの手順を実行します。

- Windows Server 2012 R2 用の大容量記憶装置ドライバを追加する場合は、「ドライバの読み込み」をクリックして、大容量記憶装置ドライバの格納場所 (CD/DVD または USB フラッシュドライブ) に移動し、ドライバ情報ファイル (.inf) を選択します。

注記 - Windows Server 2012 R2 の場合、接続された CD/DVD または Oracle System Assistant USB フラッシュドライブを介してドライバにアクセスする必要があります。ドライバにアクセスできない場合、次の図に示すように、ディスクが表示されなくなります。

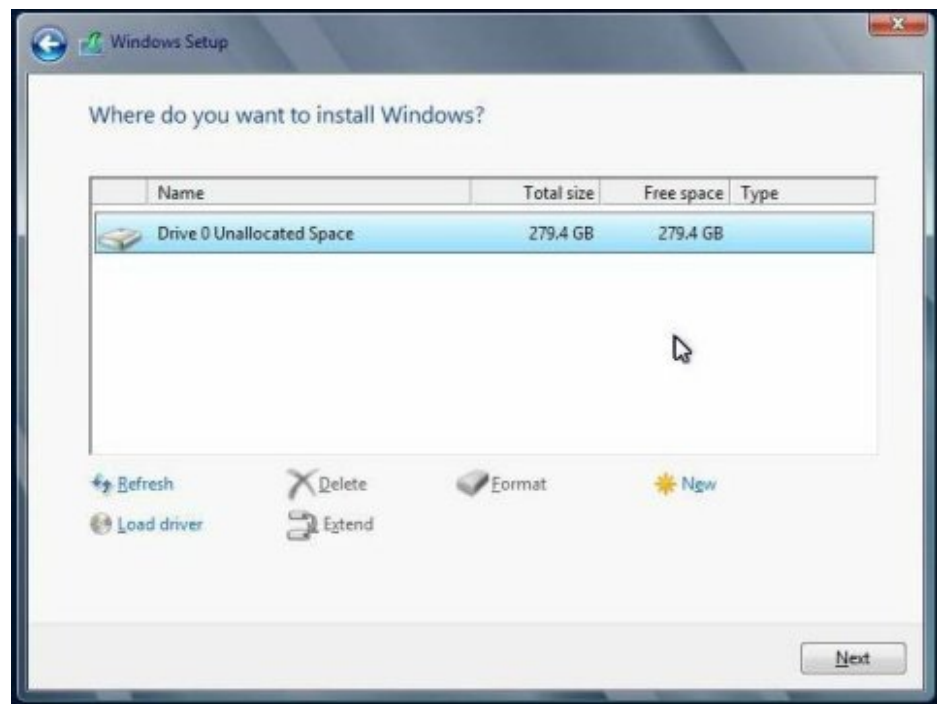
- Windows のデフォルトのパーティション設定を選択する場合は、「次へ」をクリックします。手順 8 に進みます。
- Windows のデフォルトのパーティション設定をオーバーライドする場合は、「ドライブオプション (詳細)」をクリックし、次の手順に進みます。



注意 - データ損失の可能性があります。既存のパーティションをフォーマットしたりパーティションを作成し直したりすると、そのパーティションにあるすべてのデータが消去されます。

7. 詳細ドライブオプション画面で、次の操作を実行します。

- a. 既存のパーティションを削除するには、「削除」をクリックします。
- b. 新しいパーティションを作成するには、「新規作成」をクリックします。
- c. 必要に応じてサイズ設定を変更し、「適用」をクリックします。
- d. 「次へ」をクリックします。

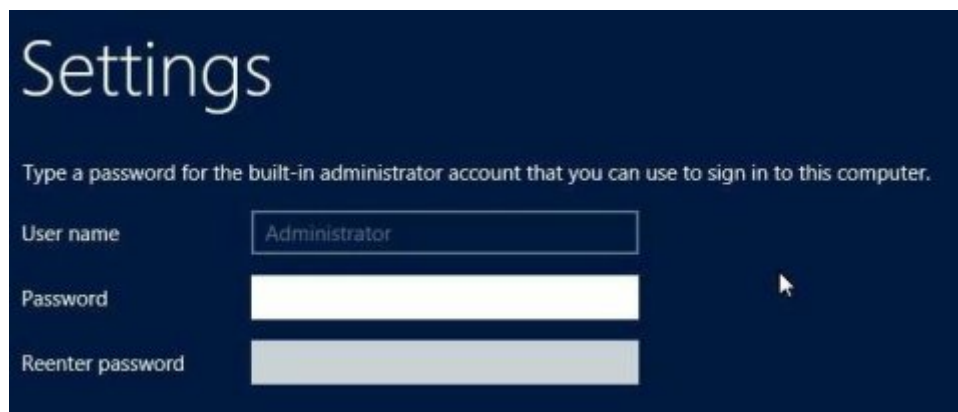


Windows のインストールが開始されます。インストールプロセス中、サーバーは複数回リブートします。



インストールプロセスが完了すると、Windows が起動し、管理者パスワードの設定を要求するプロンプトが表示されます。

8. 管理者パスワードを割り当てます。



注記 - パスワードは 8 文字で、数字が 1 文字、大文字が 1 文字含まれていなければなりません。詳細は、アカウント作成画面のアクセシビリティのリンクをクリックしてください。

管理者アカウントにパスワードを割り当てると、Windows Server 2012 のデスクトップが表示されます。

参照 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定」。](#)

▼ Windows Server をインストールする (PXE)

次の手順は、Windows Server 2008 R2 および Windows Server 2012 R2 に適用されます。この手順によってベースオペレーティングシステムがインストールされ、その後にサーバー固有のドライバや追加のソフトウェアを更新します。

注記 - Windows Server 2012 R2 には、システム用の OEM ドライバが含まれます。ドライバおよびソフトウェアの最新情報については、サーバーの『プロダクトノート』を確認してください。

- 始める前に
- PXE を使用して Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 R2 を配備するには、Windows 展開サービス (WDS) を Windows Server 2012 サーバーにインストールし、配備する OS のインストールイメージを作成する必要があります。Microsoft TechNet サイトで、これらを実行するのに役立つ記事を見つけることができます。
 - システムに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) が存在する場合、ブート可能な仮想ドライブがすでに作成されている必要があります (少なくとも RAID 0 で)。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の「[Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成](#)」を参照してください。

注記 - 電源投入メッセージとプロンプトは高速で表示されるため、すぐに画面から消えてしまうことがあります。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大することをお勧めします。

1. 次のいずれかの方法でサーバーをリセットするか電源を投入します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースの「Remote Power Control」タブで、「Reset」を選択します。
- 物理的にサーバーに位置している場合、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒間押して、正常な停止を開始し、サーバーの電源を切ります。電源が切れたら、電源ボタンをもう一度押して、サーバーの電源を入れます。

注記 - 電源投入メッセージとプロンプトは高速で表示されるため、すぐに画面から消えてしまうことがあります。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大することをお勧めします。

2. **F8 を押して、一時ブートデバイスを指定します。**
「Please Select Boot Device」画面が表示されます。
3. 「Please Select Boot Device」画面で、適切な PXE インストールブートデバイスを選択し、Enter を押します。

注記 - PXE インストールブートデバイスは、ネットワークインストールサーバーとの通信に使用される物理ネットワークポートです。

「Boot Agent」画面が表示されます。

4. 「Boot Agent」画面で、F12 キーを押してネットワークサービスをブートします。
5. 通常の Windows Server WDS ネットワークインストールを続行します。
詳細は、Microsoft の Windows 展開サービスに関する製品ドキュメントを参照してください。
6. インストールが完了したら、必要に応じてインストール後のタスクを実行します。

参照 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定」](#)

サーバーシステムツールのインストール、ドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定

これらの手順は、サーバーシステムツールのインストール、システムドライバの更新、および iSCSI 仮想ディスクの設定の方法について示しています。InstallPack アプリケーションを

使用して、システムツールおよびドライバの更新やインストールを実行します (InstallPack アプリケーションは、Oracle System Assistant ソフトウェアおよびダウンロードしたサーバー固有のソフトウェアパッケージと一緒に入手可能です)。

- [41 ページの「サーバーシステムツールのインストール」](#)
- [43 ページの「システムドライバを更新する」](#)
- [45 ページの「iSCSI 仮想ディスクの設定」](#)

▼ サーバーシステムツールのインストール

1. 次のいずれかを実行します。

■ システムに Oracle System Assistant がない場合:

- a. My Oracle Support サイトから最新のサーバーシステムツールおよびドライバパッケージをダウンロードします。

詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の「[サーバーファームウェアとソフトウェアの入手](#)」を参照してください。

- b. ダウンロードしたツールおよびドライバパッケージをサーバーに解凍します。

サーバーのシステムツールは、次のディレクトリに格納されています。

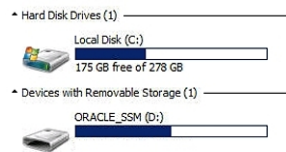
- Windows Install Pack MSM (MegaRAID Storage Manager):
Windows/*version*/Tools/LSI-MSM
- NIC Teaming for Windows: Windows/*version*/Tools/Intel-NIC-PROSet
- Oracle Hardware Management Pack: Windows/*version*/Tools/
Hardware-Management-Pack

ここで、*version* はインストールされた Windows OS のバージョンです。

■ システムに Oracle System Assistant がある場合:

- a. OS 内でファイルブラウザを開き、Oracle System Assistant の USB デバイスに移動します。

USB デバイスの名前: ORACLE_SSM



b. **ORACLE_SSM USB ドライブをダブルクリックします。**

サーバーのシステムツールは、次のディレクトリに格納されています。

- Windows Install Pack MSM: Windows/*version*/Tools/LSI-MSM
- NIC Teaming for Windows: Windows/*version*/Tools/Intel-NIC-PROSet
- Oracle Hardware Management Pack: Windows/*version*/Tools/
Hardware-Management-Pack

ここで、*version* はインストールされた Windows OS のバージョンです。

2. **サーバーシステムツールをインストールするには:**

- Oracle Hardware Management Pack については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> にあるインストールドキュメントを参照してください。
- Windows InstallPack of MSM および NIC Teaming for Windows については、次の手順に進んでください。

3. **installer フォルダに移動します。**

drive:\ORACLE_SSM\Windows*version*\installer.

ここで、*version* はインストールされた Windows OS のバージョンです。

4. **InstallPack.hta ファイルをダブルクリックします。**

InstallPack アプリケーションが表示されます。

5. **サーバーシステムツールをインストールするには、「カスタム」が選択されていることを確認して、「次へ」をクリックします。**

「カスタム」設定で、インストールするツールを選択できます。

6. **追加ソフトウェアのオプションが選択されていることを確認します。**

プラットフォーム固有のドライバをインストールするためのオプションが選択されていないことを確認します。

注記 - プラットフォーム固有のドライバオプションによって、OS にまだ含まれていないインスタンスにサーバーのドライバをインストールできます。このタスクを実行するには、[43 ページの「システムドライバを更新する」](#)を参照してください。

7. 「次へ」をクリックして、インストールするツールを選択します。
8. 「次へ」をクリックして、Install Pack アプリケーションの手順を進め、ツールのインストールプロセスを終了します。

▼ システムドライバを更新する

次の各手順では、Windows InstallPack アプリケーションを使用してサーバーシステムドライバをアップデートする方法を説明します (Windows InstallPack アプリケーションは、Oracle System Assistant ソフトウェアおよびダウンロードしたサーバー固有のソフトウェアパッケージと一緒に入手可能です)。

注記 - Windows Server 2012 R2 には、システムをサポートするほとんどの OEM ドライバが含まれます。つまり、ほとんどの場合、システムドライバを更新するために InstallPack を実行する必要がないため、このセクションをスキップできます。例外については、サーバーの『[プロダクトノート](#)』を参照してください。

1. 次のいずれかを実行します。

■ システムに Oracle System Assistant がない場合:

- a. My Oracle Support サイトから最新のサーバーシステムツールおよびドライバパッケージをダウンロードします。

詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』の「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」を参照してください。

- b. ダウンロードしたツールおよびドライバのパッケージをサーバー上に解凍します。

サーバーシステムドライバは、次のディレクトリに格納されます。

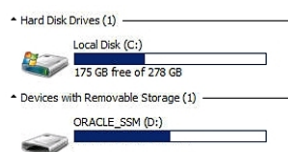
Windows¥*version*¥Drivers

ここで、*version* はインストールされた Windows OS のバージョンです。

■ システムに Oracle System Assistant がある場合:

- a. OS 内でファイルブラウザを開き、Oracle System Assistant の USB デバイスに移動します。

USB デバイスの名前: ORACLE_SSM



- b. ORACLE_SSM USB ドライブをダブルクリックします。

2. **installer** フォルダに移動します。

`drive:\ORACLE_SSM\Windows\version\installer.`

ここで、*version* はインストールされた Windows OS のバージョンです。

3. **InstallPack.hta** ファイルをダブルクリックします。

InstallPack アプリケーションが表示されます。

4. アプリケーションの処理を進め、プラットフォーム固有のドライバをインストールするためのオプションを選択します。

追加ソフトウェアをインストールするためのオプションが選択されていないことを確認します。

注記 - 追加ソフトウェアオプションを使用して、サーバースystemツールをインストールできます。そのタスクを実行するには、[41 ページの「サーバースystemツールのインストール」](#)を参照してください。

5. 「次へ」をクリックして、Install Pack アプリケーションの手順を進め、ツールのインストールプロセスを終了します。

iSCSI 仮想ディスクの設定

Ethernet ネットワーク上のブロックストレージをリモートで共有するために、Microsoft Windows Server を使用して iSCSI 仮想デバイスを設定できます。サーバーの BIOS 設定ユーティリティを使用した iSCSI の構成の詳細については、『[Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

索引

数字・記号

- 手動 OS インストール
 - Windows, 12
- 手動による OS のインストール
 - Windows Server 2008 R2, 28
 - Windows Server 2012 R2, 33
- 補助付き OS インストール
 - Windows, 12
- BIOS
 - ブートモード
 - 設定 (Windows), 23
 - 最適なデフォルトのロード
 - Windows, 22
- Hardware Management Pack 参照 Oracle
- Hardware Management Pack
- iSCSI, Windows 用の仮想ディスクの設定, 40
- LSI MegaCLI 参照 MegaCLI
- LSI MegaRAID Storage Manager 参照
- MegaRAID Storage Manager
- MegaCLI
 - インストール (Windows), 40
- MegaRAID Storage Manager
 - インストール (Windows), 40
- Oracle Hardware Management Pack
 - Windows, 40
- Oracle ILOM
 - リモートコンソール
 - Windows, 18
- Oracle System Assistant
 - OS インストール
 - Windows, 25
 - Windows, 13
 - 概要
 - Windows, 12
- OS のインストール
 - Windows, 9
 - インストール方法 (Windows), 11
- Preboot Execution Environment (PXE)
 - セットアップ (Windows), 39
 - 概要, Windows, 12

- Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) BIOS
 - ブートモード
 - Windows, 23
- Windows 展開サービス (WDS), 概要, 12
- Windows OS インストールオプション (単一または複数のサーバー), 10

あ

- インストール
 - MegaCLI
 - Windows, 40
 - MegaRAID Storage Manager
 - Windows, 40
 - Oracle Hardware Management Pack
 - Windows, 40
 - ツールおよびドライバ
 - Windows, 40
 - リモート設定
 - Windows, 18
 - ローカル設定
 - Windows, 17
- オペレーティングシステム
 - サポートされているバージョン
 - Windows, 9
 - ドライバの更新 (Windows), 43

か

- コンソール
 - リモート, 18
 - ローカル, 17

さ

- サポート対象オペレーティングシステム
 - Windows, 9

た

ツールおよびドライバ

インストール, Windows, 40

ら

リモートインストール

設定 (Windows), 18

レガシー BIOS ブートモード

Windows, 23

ローカルインストール

設定 (Windows), 17